仮面ライダーディケイドとある世界

sinne-キョノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドとある世界

【Ｎコード】

Ｎ５２１３Ｙ

【作者名】

ｓｉｎｎｅ－キョノリ

【あらすじ】

仮面ライダーディケイドと様々な者達はワールド・ブリッジと呼ばれる世界に迷い込む。其処で起こる様々な事件に士達は立ち向かう。＊オリジナルキャラが居ます。

プロローグ「少女と記憶喪失の少年」（前書き）

何やってるんだ私・・・。ちなみにプロローグなのでディケイドとか居ません。

プロローグ「少女と記憶喪失の少年」

部屋に、少女が居た。

「・・・・・世界を旅する者達が、この世界を訪れる・・・・」

少女は、言葉をつむいでいく。

「世界の破壊者だった者が・・・・。数々の世界を救う為・・・・・」

少女は、一人。虚空に言う。

「助けてあげて・・・・。数々の世界を、この世界を・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ある部屋にあるベッドの上で、少年は目覚める。

「此処は・・・・？僕は・・・・？」

「あ、目、覚めた？」

少女が少年に問う。少女は少年のことを知っている様だ。しかし。

「君は・・・・誰・・・・？」

少年からは問いの言葉が返ってくる。

「ルル・・・・。私の事・・・・忘れたの・・・・？」

「僕の名前は・・・ルルっていうの・・・？」

少年・・・ルルは、自分の事について何も覚えてないそうだ。

「・・・忘れちゃったみたいだね・・・」

少女は、一息入れてから、言う。

「あのね・・・私は鈴海ララ。貴方はルル・・・私は、ルルの双子の姉。私とルルは姉弟なの」

「姉弟・・・・・」

少女・・・ララはルルに向けて、自分の事、ルルの事を言った。

「うん、両親は居なくて、此処に二人なの。そしてね、私達は、ワールド・ガーディアンっていう仕事をしているの」

「ワールド・ガーディアン？」

「うん。この世界を数々の敵から守る為。導入された。裏の制度なの」

ルルは、自分達が普通の一般人でない事を確認すると、ルルはララに向けていった。

「で、僕は、何をすれば良いの？」

「ルルは・・・・」

そう言った所で、ララは、言葉を詰まらせる。

「無理に・・・言わなくて良い・・・」

「ごめん・・・」

ララはルルに謝罪する。

「あ、そうだ。今から、ある人達がこの世界を訪れるの」

「この世界を?」

「この世界は、様々な世界を繋ぐ、交差点の様な世界。私は、こう呼んでるの」

ララは、言った。

「ワールド・ブリッジ。てね」

続く

一話「旅人と黒の少年」（前書き）

ララ「こにゃ～、で、まあ、本格的にシリアス多めの連載が来ました～」
ルル「前回はプロローグだったからね」
士「今回は俺達が出るぞ」
ユウスケ「いやいやいや・・・微妙にネタバレだろ・・・」
夏海「てわけで、始まります」

ララ「あと、今回オリジナルの仮面ライダーが出るよ～」
ルル「出すつもりは無かったらしいけど、何故か出す事にしたらしい」

一話「旅人と黒の少年」

「此処は・・・何処だ？」

カメラを持った青年。門矢士が写真館から出てきた。

「う～ん、見る限り、普通の世界みたいだけど・・・」

「見ただけじゃ・・・何も分かりませんね」

続いて、小野寺ユウスケ、光夏海も出てきた。

「とりあえず、此処は俺達が見てきた世界とは、結構違う世界みたいだな」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ワールド・ブリッジ？」

「うん、世界の架け橋だから、ブリッジ。ま、私が勝手に呼んでるだけなんだけどね」

ララはルルに説明している。

「あ、お客様が来たみたいだね」

「お客様？」

「うん、この世界と、数々の世界を救ってくれる、救世主かな？」

「ふ～ん」

「じゃ、ルル。探しに行くよ」

「え？」

ララはルルの手を取って、外へ行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「何も、手がかりは無いな」

「それに・・・士君の服装も、変わってませんし」

「あ、言われてみれば・・・」

夏海とユウスケは士の服装に注目する。

「で、どうするんだ？」

「とりあえず・・・歩いてみましょう」

「はあ？」

夏海の唐突な一言に士は戸惑う。

「だって、何もしないだけじゃ、何も分かりません。もしかしたら、この世界で何か知っている人に会うかもしれませんし」

「まあ・・・何もする事無いから、それには、賛成かな」

夏海の言葉にユウスケは賛成する。
この行動が、本当にこの世界で士達のする事を見つける事になるのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、ルルは、覚えてない景色に戸惑っていた。

「何処に行けばいいの・・・？」

「う～ん、写真館っていうキーワードしか無いからね・・・もうこの世界に来てるなら、何処か歩いてるかもしれないけど」

ララ達は、救世主・・・士達を探している。

「彼は、マゼンタのカメラを持ってるって、聞いたけど・・・」

「誰に？」

「鳴滝って人から、彼は、その人を破壊者って言って煩かったけどね。でも、今はそんなことを言ってる暇なんてないし、とにかく、今は戦力が足りないの」

ララは説明しながら歩く、その時だった。

「ｆｎｏ；ｇｏｉｓｈｔｇ，ｏｓｉｔｊｈ；ｓｏｉｔｈｊ；ｓｏｔｉｊｇｒ」

機械の様な物がいきなり出てきた。

「な、何だこれ！」

ルルは吃驚していたが、ララは慣れたように説明する。

「これは、この世界を脅かしている物。名称は分からないけどね。ワールド・ガーディアンはこれと戦っているの、でも・・・」

ララは、少し言葉を溜めて言う。

「最近は。別の世界の怪人達も来てるの。この世界の理屈に気付いてね」

ルルは、何も出来ないのかと思い、癖になってるのか、ポケットに手を入れた。

そして、鍵の様な物を取り出した。

「・・・・・！ルル・・・・」

「これは・・・・」

ルルは、自分でも何か分からないみたいだった。

「ルル。よく聞いて、それの使い方を・・・・う！」

ララは、機械の様な物に飛ばされた。

「ララ！！！」

「こっちは・・・大丈夫・・・・。ルル・・・・それは・・・・」

ララの言葉を無視して、ルルは、その鍵を、同じくポケットに入っていた錠前に腰の前で差し込んだ。
そして、ルルの腰にベルトが巻かれる。

「！」

「僕は今、怒っている・・・・・。お前のせいでな！」

ルルはそう言って、ベルトのケースに入っていたカードをスキャンする。

「変身！！！」

その時、丁度士達がララ達のところへ来る。

「これは・・・・」

「あ、貴方達は・・・・」

これが、出会いという始まりだった。

続く

一話「旅人と黒の少年」（後書き）

ララ「変身したね・・・ルル・・・」
ルル「うん・・・こうなる予定は無かったけど・・・」
ユウスケ「ちなみに、もう一つの仮面ライダー小説と同じ順番でＤＣＤ組は出るんだってさ」
ララ「へえ～、なら、次はカズマ君が来るんだね」
ルル（薄々思っていたけど・・・ララと僕の年齢は１３歳・・・。年上相手に君付けって・・・）
士（ルル・・・それは、もう一つの小説で突っ込まれてたぞ・・・）

夏海「次回予告します！」

次回予告。
ルルは仮面ライダーに変身した。
そして、士達は、ララ達は、対面した。
そして、この世界の理屈、この世界で起こってること。
それが、明かされる。

ララ「予告・・・なのかな？」

二話「出会いとこの世界の仮面ライダー」（前書き）

ララ「今回は、まあ、士君達との色々だね」
ルル「うん」
ララ「ちなみに、投稿者はカズマのファンらしいよ」
ルル「へえ～」
ララ「まあ、そう言っても、投稿者はリイマジなら全員好きだけどね」
ルル「なら、士の出番より、リイマジの出番の方が多いの？」
ララ「まあ、そうなるね」

ユウスケ「上の会話なんだ！！」
士「てか、俺やナツミカンよりも、ユウスケ達の方が出番多くなるのか・・・！」
夏海「あれ？あらすじするんじゃないんですか？」

二話「出会いとこの世界の仮面ライダー」

「これは・・・」

士達の目の前に居たのは、見た事の無い仮面ライダー。
基本とした色は黒なのか、殆ど黒色だ。

「成る程な、この世界の仮面ライダーか」

士は、少し驚いたように言う。
そして、近くに倒れていたララをユウスケが見つける。

「大丈夫か？」

「はい・・・貴方達が・・・世界を旅する仮面ライダー達？」

「ああ。そうだ」

ララの質問にユウスケが答える。

「すみません・・・詳しい話は・・・また後で・・・うっ！」

ララが傷を負っている。
それに気付いたユウスケは、夏海に言った。

「夏海ちゃん、この子。怪我してる。手当てをしてあげて」

「分かりました」

ユウスケと夏海がララを手当てしようとしている近くで、ルルは戦っている。

「・・・・・」

ルルは、無意識に体を動かしている。
そして、軽い身のこなしで相手の攻撃を避け、相手に攻撃を与える。
敵は倒れ、ルルは変身を解いた。

「・・・・・これって・・・。ララ！！」

ルルはすぐにララの元へ来た。

「ルル・・・。私は大丈夫」

「とりあえず、喫茶店に行かなきゃ」

「喫茶店？」

ルルの言葉に、ユウスケは訊いた。

「うん、僕とララの住んでる場所・・・らしい・・・」

「？」

ルルは言葉の最後に、自信が無いそぶりを見せた。
士は、自分達の住んでいる場所のはずなのに、自分の言っている事に自信を持ってない事に疑問を持つ。

「じゃあ、僕がララを背負っていくから、僕についてきて・・・」

そして、ルルは士達を喫茶店の場所に案内する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、さっきのは何だ？ルル・・・って言ったか」

「僕にも・・・よく分からない・・・」

士の問いに、ルルは首を振る。

本当に何も分かってないようだ。

「ララが奴らに傷つけられて・・・何だか許せなくて、そしたら、いつのまにか・・・」

「本能で行動したって事か・・・」

士は言った。

「まあ、ルルは覚えて無くても仕方ないよ・・・ルルは、記憶喪失なんだから」

「記憶喪失？」

「うん・・・瀕死の怪我を負って、ルルは記憶を失くしたみたいなの」

ララは言った。

そして、ララは続けて説明した。

「さっきルルが変身したのは、この世界の仮面ライダー。仮面ライダーフォルティ。黒色で、フォルティッシモをモチーフにした仮面ライダーなの」

「フォルテッシモって・・・なんだっけな」

士が言って、ララは付け足す。

「フォルッテシモは音楽記号。強く弾くって事」

「ああ、そうか・・・」

「音楽では・・・結構基本的な記号だよ・・・」

ルルは言った。其処は覚えているらしい。

「で、この世界の仮面ライダーは、裏で活躍しているの。この世界の裏制度であるワールド・ガーディアンの所有物・・・かな？」

ララは、そう言いながら、ルルの持っていた錠前と鍵を出す。

「で、これは仮面ライダーフォルティに変身する為に必要なキー。フォルテキーベルト。この世界には何百も居たの」

「居た？」

ララの言葉に、ユウスケは訊いた。

「うん。あの機械の様な怪物が出るまではね。あの怪物のせいで、殆どの仮面ライダーのキーベルトは破壊され、修理も出来ないほど

に粉砕されてしまったの。ルルの持っている物と、あと二つ以外はね」

「成る程。この世界には仮面ライダーは三人って事か」

「そうなの。だから、この世界の数少ない仮面ライダーである一人のルルも、狙われてるの。そのせいで、ルルは記憶を失くしたの」

そう言ったララの表情は、とても悲しそうだった。
ララは、自分の首にかけているペンダントを取り出した。

「これは？」

「これはね、私の恩人の残した物なの。ラルっていう、とても素敵な人だったの。ラルもね、仮面ライダーのキーベルトを持ってたの。でもね、怪物との戦いの末に行方不明になって、その時に残っているキーベルトの一つが何処にあるか分からなくなってしまったの」

ララは、悲しそうな表情のまま、話を続ける。

「でもね、これは表向きの情報。本当の事は、私しか知らないの。実は、ラルは行方不明になったんじゃなくて、人間じゃなくなったって言うか・・・この世界には、もう居ないって言うか・・・。この世界の何処を探しても、ラルはもう見つからないの」

「悲しい事を訊いたようで・・・ごめん」

「ううん、良いの。これも、今までに起こった全てを話すにはとても大事な事なの」

ララは無理に笑って見せて言った。

その時

「ｄｆｈｄ；ｏｇｕｈ；ｄｏｆｕｈｇ；ｄｏｈｕｉｔ；ｒｏｕｈｔ；ｏｒ；８ｗ４７ｔ８ｅｈｒｕｈｔｇｌｅｉｒｈｕｌｉｓｕｒｇｈｔｌｉｓｒｕｇｔ！！！」

「これは！」

「あの機械か！」

士が言った。

「まさか、また襲ってくるとは・・・」

その時、それは、ルルを狙って、バスターを撃った。

「ルル！危ない！」

ユウスケが叫ぶが、間に合わない。

ルルが、もう駄目かと思った時。ある男が、ルル達を助けた。

「大丈夫か！士！それとユウスケ！」

其処には、剣立カズマが居た。

そして、彼はブレイバックルにカードを差込、ベルトを巻いて言った。

「変身！」

続く

二話「出会いとこの世界の仮面ライダー」（後書き）

ララ「いや～、二話目にしてシリアスどんどん来るね～」
ルル「いや・・・プロローグの時点から、結構シリアスだったけど・・・」
ユウスケ「それにしても・・・カズマの登場の仕方が無駄にかっこいいぞおい！」
カズマ「そうか？」
士「そうだ、しかも、俺はまだ変身してないのに、何でお前は変身してるんだ！」
カズマ「知らないし！なら士が変身すればいいだろ！」
士「出来なかったから言ってるんだろ！」
ルル「カズマ、負け犬の遠吠えはほっといて、次回予告」
カズマ「いや・・・ルル。流石にそれは無いと思うが・・・。まあいい。次回予告をしようか」
士「なんだと!?」

次回予告
ルル「えっと・・・なんか、カズマって奴がいきなり出てきて、変身します」
カズマ「それあらすじ！これ次回予告！」
ルル「・・・・。僕達を突然襲った怪物。その時、リイマジのブレイド。剣立カズマがブレイバックルを巻き、ヘンシした」
カズマ「何でヘンシなんだよ！其処は普通変身だろ！」
士「・・・・あいつら、お笑いコンビか？」
ユウスケ「さ、さあ・・・」

三話「登場と世界の守護者」（前書き）

士「前回のあらすじ、カズマが俺の出番奪いやがった」
ユウスケ「それだけじゃないだろ！」

ララ「今回はオリジナルキャラも増えるよ～」
ルル「あと・・・更にワールド・ガーディアンについての事も出るらしい」
カズマ「士より先に変身できた！」
ユウスケ「喜ぶところそこか！？」

三話「登場と世界の守護者」

「カズマ・・・・??」

「あれが、ブレイド・・・」

ルルとララはそんな言葉をこぼす。
士達の目の前に居るのはブレイド。剣立カズマ。

「士!俺がこれどうにかしてるから、お前達は其処の二人連れて行け!」

「あ、ああ」

士は言われるがままにララとルルを連れて行こうとするが・・・。

「ルル、いくぞ!」

「待て!ララが居ない!」

「なんだと!?」

ルルの言葉に士は動揺する。
確かに、辺りを見渡してもララの姿は無い。

「何処に行ったんだ?」

その時、

「ぐあああああ！！！」

「カズマ！！」

カズマは数の多い相手に飛ばされた。
変身はとけてないが怪我は相当なはずだ。

そして、一つの影が士達の近くを横切った。

「何だ！？」

其処に居たのは、白が印象的な仮面ライダー。

「あれは・・・何だ・・・？」

「仮面ライダー？」

士とユウスケが続けて言う。

「・・・・・」

それは何も言わず、機械の様なものを物凄い速さで倒すと、何処かへ消えてしまった。

「一体・・・なんだったんだ・・・？」

「カズマ！大丈夫か？」

ユウスケがカズマの元へ行った。
カズマは変身をとくと、士に言った。

「此処は、一体何処なんだ？家から出たかと思うと此処に突然来たんだが」

「此処は、少なくともお前や俺の居た世界じゃない。あそこに居る、ルルという少年の世界だ」

ユウスケが言うと、ルルはこう言った。

「この世界は、ワールド・ブリッジと、ララは呼んでいる・・・らしい。この世界が危機に陥ってるとか、ララは言っていた。あと、ララと僕は、ワールド・ガーディアンと呼ばれる組織に入っている・・・らしい・・・」

ルルの言葉には、自信が無いと言うか、自分でもよく分かってないような言い方。

それもそうだ。彼は記憶喪失なのだから。

「ふ～ん、世界の名前は、要約すると、世界の橋って事だよな？何でだ？」

「分からない・・・。ただ、ララはこの世界を他の世界との架け橋と言っていた」

「成る程、架け橋・・・。橋・・・。ブリッジか・・・」

カズマは分かったように言う。

「あ、ルル！皆！」

「ララ！、何処に行ってたんだ？」

ルルは訊いた、ララは

「え？えっと・・・・。隠れてたの、他の場所に」

士は、ララに訊いた。

「ちょっと訊きたい事がある」

「何？」

「さっきの、白い仮面ライダー。あれは何だ？」

士の言葉に、ララはこう返した。

「それは、無くなってたと思われたもの。ラルの使っていたキーベルトの仮面ライダー。名前はピアニィ」

「僕のがフォルティッシモ・・・。あれが、ピアニッシモって事？」

「うん。そうだよ。ルル。でも・・・あれは本当に何処かに行ってしまったと思われたけど・・・」

ララは考えるように言った。

「とりあえず、休もうぜ・・・。俺、疲れたんだけど・・・」

ユウスケが言った。

「じゃあ、喫茶店に戻りましょうか」

そして、士達はそのまま一晩あかした。

次の日。

「おはよう、あれ？ララちゃんは？」

ユウスケが起きて、ルルに訊く。

「ララは、ワールド・ガーディアン本部に行っている。朝ごはんはあそこに作り置きしてある」

ルルは言った。

そして、夏海も起きてくる。

「そうですか・・・ララちゃんはその本部に行ってるんですか」

「うん。・・・・あの士って奴は？」

「士はまだ寝てる。昨日ので疲れたみたいだしさ、もう少し寝させてやれ」

カズマが出てきて言った。

（お前が言うなよ・・・）

ちなみに、ユウスケはこう思ったとか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、ララは・・・。

「おはようございます。小原さん」

ララの目の前に居るのは小原(おはら)。下の名前はララにも分かっていない。

「お、ララちゃんか、どうしたんだ？」

「いえ、ピアニィの事についてです。あと・・・仮面ライダーの」

「ララちゃんにしては、真面目な話だな。いつもは、弟君の暴走とかで大慌てしていたのにな。それに、最近顔出ししていなかったが、どうしたんだ？」

小原はララに訊く。

「いえ・・・ルルは、今、記憶喪失なので。では、本題に入ります」

小原にとっては、ルルの記憶喪失も気になるのか、だが、ララの話のほうが重大なので、ララの話を訊く事にした。

「昨日、ピアニィを目撃しました」

「なんだと？」

「はい、あのキーベルトはもうすでに何処かへ消えてしまったと思われていたのですが、ピアニィのキーベルトはありました。しかも、新しい変身者を迎えています。この件については、私達のほうで機密にしていただきますか？」

「ああ、お前は、一応俺の上司だしな。上司の命令は絶対だ」

「そして、仮面ライダーについての話です」

「うまくいったのか？」

小原はララに訊いた。ララは、コクリと頷いて、言った。

「はい。ディケイドの門矢士。リイマジクウガの小野寺ユウスケ。リイマジブレイドの剣立カズマ。この三人を呼び出す事に成功しました」

「この世界にあるほかの世界の仮面ライダーの情報は、この三人しかないからな。ディケイドに、他の世界の仮面ライダーについて訊けると、信じているよ」

「はい。まだ少ししか話していないですが、悪い人ではありません。ですが、一つ気がかりな事があります」

「どうしたんだ？」

ララの言葉に小原は少し顔をゆがめる。

「私は、彼らだけを呼び出したつもりですが、何故か、彼らに光夏海という女性がついてきているんです。彼女もまた、仮面ライダーなのでしょうか？」

「分からんな。だが、そういう可能性がある」

「分かりました。では、私は、今から彼のところへ行きます」
「あいつか・・・。ララちゃんくれぐれも、自分の年齢考えろよな」
「私は、貴方が思っているほど子供な年齢じゃありません」
「ははは・・・それは悪かった。じゃあな」
「はい」

そして、ララは部屋を出た。
ララは、正直言って自分が子供扱いされるのがあまり好きではない。
かと言って、あまり年上に見られるのも好きではない。
ララは、”同年代”が一番話しやすいのだ。
ちなみに、小原の年齢は２３歳。ララよりは１０歳くらい年上のはずだが、ララはあまり子供に見られるのが嫌なので、年齢については少々煩い。

ララは、ある場所で待っていた。
「あ、ララ！久しぶりだな～。少し見ない間に、少し大きくなったんじゃないのか？」
「そうかな？失人君」
彼は歌野失人（うたのしつと）。
ララの部下だが、やはり年齢はララより年上なはずの２０歳。
「あと、ララ。年上を君付けするのはよくないって言っただろ」

「だから、年下扱いしないでって。私は同等が好きなの。まったく。失人君は・・・。で、本題だけど、私と一緒に来て」

「はあ？」

そういわれながらも、失人はララの言うとおりにララの喫茶店に来た。

「ララの店か、此処に来るのも久しぶりだな」

「おかえり。ララ」

ルルがララを出迎えた。

「そっちの人は？」

ルルは訊いた。それは、彼が言うはずの無いことばだった。ルルは、彼を知っているはずだからだ。

「ルル？俺を、覚えてないのか？」

「あ、ああ・・・失人君。ルルは、記憶喪失なの・・・」

ララの言葉に、失人は驚く。

「え？。あ、ああ！！だからか！なんだか、ルルが居ないなとか、ララが最近本部に顔出さなかったのも、そういう事か！」

そして、お店の奥の方からカズマが出てきた。

「煩いな～。あれ？ララちゃん・・・だっけ？その男の人は？」

「あ、この人は私の・・・・一応、部下？の歌野失人君」

「始めまして。ララ。この人が、例の別の世界の仮面ライダーか？」

「うん」

カズマは、その言葉に、疑問を持った。

「俺が、仮面ライダーだって、分かるのか？」

その言葉に、失人は

「ああ、これが、ララから言われた、この世界を救う方法に居た。救世主だからな」

「うん、今から、全員を呼んできて、昨日はいえなかったけど、とても大切な事を今から言うから」

ララも、真剣な顔になって言った。

続く

三話「登場と世界の守護者」（後書き）

ララ「もう！私を年下に見ないでよ！」
ルル「そういえば、オリジナルライダー二人目だな」
ユウスケ「何か、秘密があるのか・・・」
カズマ「この世界の秘密とか、そういうの気になるよな！」
士「っていうか、これの主人公誰だ？」
ルル・士以外全員「ルル（君）だろ（でしょ）」
ララ「あと、ヒロインは私らしいよ」
カズマ「投稿者の話によると、士よりリイマジの俺らのほうが出番多いらしいし」
士「くそおっ！」

剣崎「それでも・・・出番がまったく無いと思われるオリジの方が・・・な・・・」
城戸「・・・うん・・・」
フィリップ「でも、W以降は出番あるらしいよ、翔太郎」
翔太郎「そうか・・・。ならいいか」
クウガ～キバのオリジ「お前等は出番ありそうでいいよな！！！！！」

ララ「あれ？次回予告が行方不明・・・」

四話「仮面ライダーと召集の秘密」（前書き）

ララ「今更だけど私達小説キャラの設定とかね」
ユウスケ「本当に今更だよな！」

鈴海（すずみ）ルル　１３歳（？）　男
主人公。
暗めの性格。大切な人は命をかけてまで守る主義。
俗に言うヤンデレ。でもツンデレ成分も少しある。
物語が始まった時は記憶喪失なためララの事しかあまり信じられない。
色々な人との出会いによって性格が暗いのは改善されていく。
記憶を失くす以前はララと同じような性格の少年だったらしい。

鈴海（すずみ）ララ　１３歳（？）　女
ヒロイン。
明るい少女。天然。時々天然Ｓな面も見せる。
ルルや自分について色々知っているようだが・・・？
命の恩人のくれたペンダントを大切にしている。

歌野失人（うたのしつと）　２０歳　男
もう一人の主人公。
お喋り（皆曰く、本人は否定している）
明るい青年。ララの部下であり良き理解者。
ララを子ども扱いしておりその度にララに怒られる。
新米のワールド・ガーディアン。
物事は結構慎重に考える（たまに慎重に考えすぎてから回る事がある）

小原（おはら）　２３歳　男
楽観的な男。
ララの部下。情報管部隊を管理している。
失人同様ララを子供扱いしており怒られている。

カズマ「ララの部下ぁ！？」
ワタル「上司の間違いじゃないんですか！？」
ララ「何故ワタル君が居るかには触れないでおくけど何でそんなに驚くの！？」
ルル「とりあえず・・・。話しに行こう・・・」

四話「仮面ライダーと召集の秘密」

会議室には、士、夏海、ユウスケ、カズマ、ララ、ルル、失人が集まっていた。

「で、何だ？大事な話って」

士はララ達に訊いた。

「うん、皆がこの世界に来たのは、偶然じゃなくて仕掛けられた事なの」

「仕掛けられた事ですか？」

夏海がララに訊いた。

ララは頷いて話を続けた。

「この世界は、数々の世界と繋がった世界なの。誰もが此処に来たいと思えばこの世界に来れる。此処に居る誰かに合いたいと思えばこの世界に来れる。そんな世界なの」

「誰もが自由に行き来出来る世界って事か」

「で、この世界を狙うわる～い奴等が、俺達の世界を襲ってくるから、ワールド・ガーディアンってのが出来たんだ。ワールド・ガーディアンにある部隊はララの応戦部隊。小原さんの情報管理部隊。冷菜さんの物質管理部隊。この三つに分かれてるんだってさ。ま、俺はまだ去年に入隊したばかりだから、あまり分からないんだけどな」

「お喋りな奴だな・・・」

士は失人の言葉につぶやいた。

「でも、最近ワールド・ガーディアンに対抗するように強い敵が現れて、殆どのキーベルトが壊れてしまったの。前も、言ったように」

「ワールド・ガーディアンの中でもとても貴重な物になってしまったて事さ。元々、装着者には色々な厳しい訓練が必要だったのに。それに相応しい者にしか、それは使えなくなってしまった」

「ワールド・ガーディアンの上層部が会議をして厳しいオーディションの末に決められるの」

「しばらくして何も成果が無かったらそれは剥奪。っていう制度に繰り上げられたのさ。でも、今はある二人に安定しているけどな。それがルルと、金銅(きんどう)ロンって奴さ」

ララと失人は交互に説明する。

「成る程な・・・。この世界でも、仮面ライダーは仕事として扱われてるのか」

「ううん、これは、ただのやる事。それをしてもお金をもらえはしないよ」

士の言葉に、ララは返す。

その言葉に、ユウスケは疑問を言う。

「でも、そしたら、子供二人で生活はどうしてるのか？」

「だから、言ったでしょ。喫茶店って。あと、子供扱いしないで」

「喫茶店？って事は、店開いてるんだよな？てか、未成年だよな？二人とも」

「あのね、だから・・・・。まあ、確かに、未成年かもしれないけど・・・。まあ、お店開いてるよ」

ララの未成年という言葉を否定するような言動に士は少し警戒するも、ララ達の言葉を信じて話を聞いている。

「で、大体の事は分かったか？」

失人が訊いた。

「ああ、大体な」

と士が言った。

「・・・・・・・」

ルルは、少し沈黙していた。

会議室での話は、これで解散となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カズマ、訊きたい事がある」

ルルは、カズマに訊いた。

「何だ？」

「さっき、士がこの世界でもって言ったけど。そういう世界もあるのか？」

「何で俺に訊くかなあ・・・。まあ、俺の世界では、仮面ライダーっていうのは、仕事になってるんだ。仮面ライダーは会社の社員。そして、俺は其処のエースだったんだ」

カズマは過去を思い出すように語った。

「ふ～ん」

「ま、色々あってさ、降格されて、食堂に入れられて、そして、士と会ってさ。そして、士は通りすがるように、事件を解決して、何処かに消えてしまったのさ」

ルルは、カズマの話を真面目に聞いていた。

「そうなんだ。僕は、誰かに救われた事は、あったのかもしれないけど、覚えてないんだ」

「その後に、士とまた会ったんだ。その時は、ライダー同士で憎しみあい、互いの世界を消しあっていたんだ」

「互いの世界を・・・。でも、それは、そう言われたんだよね。そうしないと、生き残れないって。僕も、そんな事があった気がする。なんだか、誰かを憎んで、でも、それは誰かに止められて、それで

も、誰かを殺した。何だか、そんな気がする」

ルルは、たそがれるように空を見ていた。

「でもさ、その後、ちゃんと消えた世界は復活したんだ。士や夏海、ユウスケ達のおかげでな。俺の世界も一度消えて、でも、戻ったんだ。他の世界も同様さ」

「世界を消す・・・か・・・」

ルルは、その言葉に続けて、まるで何かにそう叩き込まれたように言った。

「この世界は、絶対に消しちゃ駄目だ。この世界と他の世界は鎖のように繋がっている。この世界を消したら、他の世界も引きずられるように消える。って・・・誰かが言っていた気がする。僕の、恩人が」

「ルルの・・・恩人・・・。ララの言っていたラルって人か」

「ルールルー！カーズーマーくーんー！早く来ないと、夜ご飯なくなっちゃうよ～！！！」

ララの呼ぶ声が聴こえた、ルルは、カズマと一緒にララ達の元へ行った。

カズマの頭に、さっきのルルの言葉が張り付いてはがれはしなかった。

（この世界を消したら・・・俺や、皆の世界が消える・・・。そん

な事、絶対させてやるか！！）

続く

四話「仮面ライダーと召集の秘密」（後書き）

ユウスケ「主人公何処いったあああ！！！！」
カズマ「ルル」
ララ「ルルは居るよ？」
ルル「ユウスケお前絶対後で締める」
士「ユウスケ、どうした？」
夏海「ユウスケ、何か変ですよ？」
ユウスケ「だってさ！何だか、最後の所主人公がカズマみたいになってたじゃないか！」
ララ「・・・・投稿者がファンだから」
ユウスケ「・・・・分かった・・・。もう何も言わない」

ララ「次回、なんと！あの人が来ます！」
ルル「て事は、情報収集で誰かの情報が得られたんだ」
カズマ「誰か来るんだろうな～（ワクワク）」
士「ユウスケ・・・」
ユウスケ「なんだ？」
士「カズマって、あんな奴だったけな・・・。何だか、さっき副音声でワクワクと聴こえたんだが・・・」
ユウスケ「気のせいじゃないのか？」
士「だと良いんだが・・・」

追記
失人「………」
ララ「ドンマイ！失人君」
ルル「…本当に・・・ドンマイとしか…」

失人「投稿者め…」

六話「新情報と龍騎の登場」（前書き）

カズマ「題名軽くネタバレだね」
ユウスケ「まあ、そんなもんだろう」
ララ「ちなみに、投稿者は最近風魔の小次郎に興味があるんだって」
カズマ・ユウスケ「「それって俺らの俳優目当てじゃないのか！？」」
士「・・・・（この二人の競演は結構あるしな）」
ルル「そういう士も・・・ユウスケの人とはテニミュであるじゃん・・・」
ララ「ブログ見たけど結構仲良いっぽいよね」
ルル「僕も見た。っていうか、投稿者が見てた」
ララ「イケメンとかよくわからないらしいけど、まあ、かっこいいんじゃない？の軽い気持ちで見てるって」
ルル「変な人だよね」

夏海「前回の仮面ライダーディケイドとある世界は・・・」

ユウスケ「カズマとルルの好感度があがった」

夏海「・・・です！」

ルル・カズマ「「おおおおおおおおおおおい！！！！！」」

六話「新情報と龍騎の登場」

「ふあ～」

ララは、自分の部屋で目を覚ました。
昨日は、失人を呼んでこの世界やこの世界の仮面ライダー等について話していた。
ルルとカズマの仲が良くなってた事には、ララは少し気になっていた。

「おはよう、ララ」

ルルが、ララに挨拶した。

「おはよう、ルル。士君に、ユウスケ君も」

「ああ」

「おはよう」

ララは、近くに居た士、ユウスケに挨拶する。

「で、突然悪いんだけど、ちょっと聞きたい事があるの、いい？」

「ああ、いいが。何を聞きたいんだ？」

「貴方達が旅で出会った仮面ライダー達の事について」

ララの言葉に、士は訊ねる。

「何でだ？」

「情報が欲しいから。だけじゃ駄目？」

「まあ、いいが。何から聞きたいか？」

「う～ん、何でも良いよ。思い出せたものからでも」

「そうだな・・・・・・。う～ん、いまいち覚えてない世界があるんだよな。何をしたか何も無かったような・・・」

「それ、何処の世界だ？」

ユウスケの言葉にルルは疑問を持つ。

「確か・・・・」

ユウスケが言おうとしてた言葉を、士が言う。

「龍騎の世界だ。あの世界は、もう何もしなくて良くなったからな。あのままブレイドの世界に行って良かったんだ」

「？？？？」

「ねえ、その話もっと聞きたい！」

ユウスケが何も分からないように考えている横で、ララは士にもっと話を聞こうと訊いている。

「あ？ああ、その世界の龍騎は、辰巳シンジって奴なんだ。まあ、ユウスケが何もせずに別の世界に行ったてのはユウスケ達からじゃ、そうだからな」

「あ・・・・。多分・・・分かった・・・」

ルルは何かを思い出したかのように言う。

「それって・・・・タイムベントっていうのだろ・・・」

「あ、ああ。何でお前、知ってるんだ？」

「わ・・・分からない・・・」

ルルは、うつむいた。

「ルルは、多分。何か、断片的なものは覚えてるんだと思うの。記憶の底で覚えてる事が、あると思うの」

「何で、そのお前がそれを知ってるんだ？」

「それはね、多分、色々な世界のことを調べていたからなの。ラルから聞いた知識。この世界のモノじゃなくなったラルから、色々な事が聞けたの。士君や、カズマ君の事は、ラルから聞いたの。でも・・・」

ララは言葉を詰まらせる。

「でもね・・・。最近、ラルとの連絡がまったく取れなくなったの。この世界から完全に離れてしまったのか、それとも、何かに遮られ

てるのか、まったく分からないけど。それで、毎日やっている、おまじないのようなものがあるんだ」

「それは、何だ？」

ララが取り出したのは、タロットカードの様な物。

「これで、今日や明日に、どんな誰が来るのか、大体分かるの」

ララは、山積みになっているカードの一番上を取り出した。

「ほら、龍騎は今日か明日のうちに、この世界に来る。じゃ、探しに行くよ」

ララは、ルルの手を握って行こうとした。

「ら、ララ。ちょっと待って」

「何？」

「あ、あの・・・人ごみは・・・ちょっと・・・」

「う～ん、じゃあ・・・・」

ララは考えるようにして、言った。

「カズマ君についてきてもらおうかな。何だか、結構仲良いみたいだし」

「お、俺！？」

丁度居たカズマが驚く。

「うん、じゃ、行くよ！」

ララは無理矢理二人を連れて外へ出た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃあ、まずは・・・。あ、そうだ。丁度良いし、ワールド・ガーディアンの本部にいこうか」

ララは、そう言って、カズマが

「え、でも、それなら、士とか連れて行った方が良かったんじゃないか？」

「ううん、まあ、連れて行くのは誰でも良いし。それに、少し寄るだけだから。少しは顔出ししとかないと、小原さんとかが煩いんだよね～」

（この子って、そういえば、度々子ども扱いしないでとか言うけど・・・。普通の子供じゃないのか、背伸びしてる子供なのか・・・。どっちなんだろう・・・）

カズマはふとララの言動について疑問に思うも、ララに連れられて行く事にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、青年、辰巳シンジは、自分が知りもしない場所に居て、少しあわてている。

「こ・・・此処は何処だ？さっきレンさんと一緒に行って帰って・・・。で、家のドアを開けたはずがこう・・・・。う～ん、とりあえず、歩くしかないのか・・・？」

シンジは、先ほどまでパートナーのレンと一緒に取材に行っていた。そして、取材が終わって家に帰るはずだった。
でも、彼は知らぬ間に自分のまったく知らない場所に飛ばされていた。
その時、こんな会話が聞こえた。

「え！？じゃあ。士君達は、許可も無しにこの街うろついてるの！？もう・・・。カズマ君、ルル。仕事増えた。夏海ちゃんからの連絡だけど、士君とユウスケ君が勝手に家出て待ちに行ったって・・・。はあ・・・人探しの仕事が増えた・・・」

「ええ！？はあ・・・士ぁ・・・」

「あいつら、後で締める・・・」

声を発している人物は知らないが、その会話に自分の知る名前が出てきた事にシンジは驚く。

「あの・・・貴方達は・・・！」

シンジは思わずその人達に話しかけていた。

「あ・・・！シンジ！」

カズマは、彼に気付いて、振り向いていた。

「カズマ！」

「二人とも・・・知り合い？」

「？」

少女と少年・・・ララとルルは目の前で起こってることについていけていないが。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、貴方が、龍騎の辰巳シンジ君なんだ」

「ああ、僕は、故郷の世界では、カメラマンしてるんだ」

そう言って、シンジは自分の撮った写真を見せる。

「うわあ・・・凄い・・・」

ルルは感心したように言った。

「そういえば、何でカズマ君とシンジ君は知り合ってたの？」

「あ、それは、ライダー大戦の世界っていうので、消滅後、世界が復活したとかいう話、ルルにもしただろ」

「うん。ユウスケや士達のおかげでって」

「で、その時共闘したんだよ。それぞれの世界の仮面ライダー達が」

「その時、知り合ったんだ」

「へえ・・・」

そうやって話していて、シンジは思い出したように言う。

「あ・・・そういえば、士達探してるんだよな？」

「「「ああっ！」」」

「忘れてたのか・・・」

シンジは呆れたように言った。

続く

六話「新情報と龍騎の登場」（後書き）

シンジ「てわけで、辰巳シンジでーす」
カズマ「いよ！」
ララ「ちなみに、投稿者は辰巳シンジの俳優さんはあまり知らないっていうか。リイマジはユウスケ君とカズマ君の人しかあまり興味が無いんだって」
シンジ「それ、僕に締められたいから言ってるのか？」
作者「っていうか、シンジの話し方とか一人称ハッキリ言って覚えてない・・・ｏｒｚ」
シンジ「そうなのか！？」
ララ「う～ん、話に寄れば、普通の時が僕。ヤンデレモードの時が俺らしいって事聞いたけど・・」
ルル「そうなのか！？」

シンジ「・・・・・」

夏海「次回予告！」

士「次回はちゃんと俺やナツミカンの出番はある予定だそうだ」
ルル「あくまで予定・・・（笑）」
シンジ「僕は結構ヤンデレとか言われてるけど、この小説では結構一般人らしいよ」
ララ「次回もお楽しみに！」

七話「捜索と覚醒の瞬間」（前書き）

ララ「なんかサブタイトルかっこいい～」
ルル「厨二っぽいけど・・・」

カズマ「さっきまで作者がオリジのブレイド見てたけど・・・」
シンジ「？」
カズマ「『オンドゥル語』とかいう感じのかつぜつの悪さから出てきてしまった言葉で不意に笑ってしまったって・・・・。超シリアスなシーンで・・・。リイマジの俺から言わせて貰うけどさ・・・。なんか悲しいっていうか・・・なんというか・・・」
シンジ「・・・・・ドンマイ」

夏海「前回までの仮面ライダーとある世界では！」

ララ「士君とユウスケ君が無断で外に出歩いた！」
ルル「その時に、目的の一つである龍騎の捜索を達成した」
シンジ「そして僕達は士を探しに旅に「出てない！」」←ララ

ユウスケ「・・・・」
カズマ「どうしたんだ？ユウスケ」
ユウスケ「シンジって・・・。ボケキャラだったか？」
カズマ「さあ？」

七話「捜索と覚醒の瞬間」

「で、士達は、何処に居るんだ？」

シンジはララ達に訊いた。

「それが分かってたら苦労しないって・・・・」

ララは疲れたように言った。

「だよな」

シンジもそれに同意する。

「・・・・。もしかして・・・・！」

ルルは、何かを思いついたようにララ達に言った。

「何？」

「もしかしたら・・・士達は・・・本部に行こうとしたのかもしれない・・・・。多分だけど・・・・」

「ワールド・ガーディアンの本部・・・・。確かに、それの可能性もある。カズマ君、シンジ君。一緒に来て！丁度本部にも行くところだったし」

「あ、ああ！」

「うん！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「士～、ノリに乗って出てきたけどさ？その本部って、俺達場所知らないだろ・・・。やっぱ、あの時ララちゃん達についていくべきだったんじゃ・・・」

「仕方ないだろ、其処に行ったほうが良いって気付いたのがあいつらが出て結構経った後だったんだからさ」

士はユウスケに言った。
士とユウスケはララ達に無断で外に出歩いている。
実は、彼女達からは無断で外出してはいけないと言われていた。
その理由は、彼らがまだ此処の地理に詳しくないのと、命を狙われる可能性が高いからだ。
彼等は戦闘慣れはしているものの、一気に襲い掛かられては流石に持たない、と彼女が判断して無断で外出してはいけない事になっている。

「後で締められても知らないぞ・・・」

「その時はお前も一緒だ。俺とお前は共犯なんだからな」

「うう・・・・」

士の言葉に反論できないユウスケ。
その時

「ｆ：ｅｉｆｇｊｅｒｏｉ：ｇｊｅ：ｏｔｉｊｇ：ｅｉｏｊｒｔｏ

ｄｃｄ＆ａｍｐ；ｋｕｕｇａｏｅａｒｇｎ；）））」

「こいつらはっ！」

「この世界を脅かしてるとか言う奴らか」

士とユウスケはそれぞれ言う。

「ユウスケ、行くぞ」

「ああ！」

「「変身！！」」

二人は変身した。

クウガと、ディケイドが、其処に立っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「本部には来てない・・・ですか・・・。分かりました。小原さん」

「ああ。それにしても、これがララちゃん達の仲間か。宜しくな。俺の名前は小原だ」

一方、ララ達は本部に来ていた。

ララ達と小原は軽く会釈をして、話していた。

「此処が、ワールド・ガーディアン本部・・・」

「で、あいつらは、出てる？士君達が狙われて、彼等は無事とはい

えないんじゃないの？」

ララは小原に聞く。

「ああ、あいつら・・・ロベターは、現在この本部の近くで暴れているとの速報があった。其処で、ピンク色の仮面ライダーと赤い仮面ライダーが戦ってると聞いた」

「ディケイドと・・・・クウガ？士君達だと思う・・・。カズマ君、シンジ君、ルル。行くよ」

「あ、ああ、ちょっと待て！」

「何？」

カズマは、ララを引き止めた。

「何で、君も行く必要があるのさ！俺達だけが行けば良いんだろ！」

カズマはそう言って、自分だけで行こうとした。

「私にも、行く義務があるから」

そう言ったララの表情は、１３歳とは思えないものだった。

「とにかく、だからと言って君もいく必要は無い。俺達だけで行くから、じゃ、ルル、シンジ。行こう」

「・・・・うん。僕も、ララを巻き込みたくないから・・・」

「じゃ、僕も」

そう言って、三人は出て行った。

「私だって・・・。行く義務があるんだよ・・・。行かなきゃ、いけないんだよ・・・」

ララは、そう言って立ち尽くしていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ぐはあっ！」

「ユウスケ！」

「ｎｖｎｆ：ｉｏｎ：ｙｏｕｅａａｅｕｏｗａ；３３８３２０３９５２０８７４２８７ｒｕｆｒ９４」

機械の様な敵・・・・ロベターはユウスケを飛ばし、士のもとへ近寄ってくる。

「・・・・くそっ！」

士の前には、数十体ものロベターが居る。

「それだけ、俺達が此処に居るのが気に食わないのか！」

数十体を二人で相手にするのは、結構難しい事だ。

士は、それでも無理をして戦っている。

「お、敵さん発見～♪ルン。狙撃よろしくな」

「はいはい・・・。あんた、無駄に格好つけなくていいから、さっさとやれ！」

突然現れた二人組は、片方の女が男の方を蹴り飛ばしていた。

「いててて・・・。ルン！痛いだろ！」

「そんな事どうでも良いから、さっさとその人達助けなさいよ！あんたも一応資格者なんだから！」

「はいはい！わーったよ！じゃ、行くぜ・・・変身！」

彼は、黄色に黄金の装飾の入った大きい首輪のような錠前・・・ペンダントキーに鍵を差込み、変身した。

「貴方達が、ララちゃんの言ってた仮面ライダーね。私の名前は金銅ルン。あっちは双子の弟のロン。そして、あの仮面ライダーは、この世界に残った数少ないライダーの一つ。仮面ライダークレンシェ。じゃあ、早く貴方達は逃げて！その体じゃあ、ロクに戦えないでしょ！」

「・・・・・・ああ！分かった。ユウスケ、逃げるぞ！」

「あ・・・・・ああ・・・・・」

士とユウスケは変身をとくと、二人でその場を離れようとした、だが。

「f；eoituhr；eaauith；eth！！！！」

「くそっ！」

行く手を阻まれたのだ。

「待て！」

「ソイツをやるなら・・・僕達をやってからにしろ」

「士、ユウスケ。久しぶりだな」

カズマ、ルル、シンジが来たのだ。

「シンジ・・・！お前も来てたのか！」

「ああ、じゃあ、行くぞ！」

「「「変身！」」」

三人は変身した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「やっぱり、私も行かなきゃ。行かなきゃ・・・駄目なんだ」

そう言って、ララはその場を後にして、ルル達の所へ行こうとした。

その時、ララはふと、思い出した。

「そういえば・・・昨日、龍騎の事を聞く前に、呼んだはずの仮面

ライダーが居るんだ・・・」

仮面ライダーカブト。
ララが、彼がもう既にこの世界に居る事を知るはずが無い。
彼は、まだクロックアップの世界に閉じ込められてるのだから。

「まさか・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「くそうっ！こんなに人数が居てもだめなのか！」

カズマが嘆く。

「ロベターは結構強いらしいからな、ある程度力があるはずのこの世界の仮面ライダーさえも殆ど壊した相手だ。だいぶ強いだろう・・・！」

ルルも結構苦戦している。

その時だった、一瞬、何か赤いのが通り過ぎたような気がした。
そして、ロベター達は一瞬にして壊れ、動かなくなっていた。

「何だ！」

「あれは・・・赤い仮面ライダー・・・」

ルルは、脳裏に一人の仮面ライダーが思い浮かんだ。

「カブト・・・か・・・」

続く

七話「捜索と覚醒の瞬間」（後書き）

シンジ「は～い、じゃあ、自己紹介お願いします」

ロン「金銅（きんどう）ロンだ！」

ルン「金銅ルンです。ロンが煩いと思いますが、気にしないで下さい」

金銅（きんどう）ルン
１８歳　女
しっかりしている少女。
ララとは結構前から知り合っている。
ちなみに結構戦闘慣れしている
ロンのよき姉でありストッパー

金銅ロン
１８歳　男
仮面ライダークレンシェの装着者。
はっちゃけた性格の青年であり、結構ルンに怒られている。
記憶を失くす前のルルを知っている人物。

ロン「だ！」
ルル「煩い、黙れ」
ルン「あ～そうそう、そんな風に前も罵られてたのよね～」

八話「クロックアップと誤解の連鎖」（前書き）

ソウジ「よ」
ララ「・・・・。作者・・・」
作者「はい・・・」
ララ「まず、タクミ君に謝ろうか、順番、最初に決めてたのに出てたの、タクミ君だよね？ソウジさんより先に」
ソウジ「・・・俺もすまない・・・」
作者「すみませんすみません。何故か話がそう進んでしまいました」
シンジ「でも今回でるよな？タクミ」
ララ「そうだったの！？」
ルル「大丈夫だ。出ることすら無いと思う電王よりはましだから」
カズマ「成る程、出ん王か・・・」

カズマ以外全員「・・・・・」

カズマ「・・・・」

八話「クロックアップと誤解の連鎖」

「カブト・・・？」

ルルは、不意にそう言い放っていた。

「カブトだと！？ソウジがもうこの世界に来てるのか！？」

士はそう言う。

「でも、今・・・赤いカブトムシ・・・の様なライダーが見えた・・・」

「確かに、あの世界のカブトは、クロックアップの暴走で、ずっとあの状態だ。この世界に来てもそれが直ってないなら・・・」

ユウスケもルルの言葉に同意する。

「でも、ララ達にカブトの情報は無いんじゃなかったのか？」

士は疑問に言った。

「分からない・・・。でも、僕はカブトを知っている。何故か分からないけど・・・」

「ルル、カブトの情報。ララちゃんが持っていたはず」

先程の少女・・・金銅ルンが言う。

だが、ルルはルン達を知っていようがいまいが、ルルは記憶喪失な

ので、ルン達のことを覚えていない。

「誰・・・？君達は・・・」

「・・・おいおい、冗談はよしてくれよ、ルル」

ロンは肯定したくないように言った。

その表情は少々青ざめている。

「ごめん・・・分からない・・・」

「成る程、それがララちゃんが暫く本部に来なかった意味ね。で、ララちゃんは？」

「ああ、それは俺達が本部とやらに置いて来た」

「ララが・・・危険な目にあうのは・・・嫌だから・・・」

カズマとルルが説明する。

「とりあえず、本部に行きましょうか」

ルル達は、本部に行く事となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カブト・・・。そういえば、もうこの世界に来てるはずなんだ。ラルから聞いた情報だと、クロックアップの世界に閉じ込められてるって言ってたんだ・・・。何で、その情報忘れてたんだろう・・・。まあいい。今から、カブトを捕まえに行こう」

そう言って、ララは本部を出た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「「「入れ違い！？！？？！」」」」」

小原の言葉に、ルル達は驚愕する。

「ああ、さっきララちゃんはカブトがなんとか～とか言って出て行ったぞ」

「何で・・・引き止めなかった・・・！」

ルルは、怒ったように小原をにらみつける。

「アイツ、絶対聞かなかったぞ、誰が言ってもな、ルル。お前は覚えていないようだが、ララちゃんには色々あるらしい。お前にもな。ラルの残した言葉に従って、自分がやりたいようにやっているんだ。ララちゃんはな」

「・・・・」

流石に今の小原に言葉に、何も言い返せないのか、ルルは黙る。

「でも、カブトがなんとか～って、カブトを探しに行ったのか？ララは」

「「「あ」」」

そうだ、生身の人間である筈のララには、クロックアップの世界に閉じ込められたカブトを捕まえられる筈が無い。
捕まえられるとしたら、クロックアップ中のカブトと同じマスクドライダーか、ワームだけである。
ララがどっちでもある筈が無い為、ララはどうやってカブトを捕まえようとしているのだろうか？

「・・・・・」

「お前でも良いのか？仮面ライダーの情報を聞かせるのは」

カズマが言った。

「うん・・・そうらしい・・・」

「士、他のライダーについて何かルルに話せ」

カズマは、何を考えてるのか士に別のライダーの情報をルルに提供するよう問い詰める。
ルルは、その考えをもう理解したようだ。

「？どういうことだ？カズマ」

「・・・士・・・。僕からもお願いだ・・・」

「ああ・・・まあ、良いが。そうだな・・・少し、トラウマになった世界があるな・・・」

士は、思い出すと溜息をついた。

「その世界のライダーは、５５５だ。変身者は尾上タクミ。スマートブレイン高校の学生だ」

士はその世界の仮面ライダーについて話していた。

（ラル・・・。この情報、聴こえてる・・・？）

（聴こえてるよ、ルル。今から５５５をこの世界に送ります。それと、ララに言ってください今まで連絡を取れなくてごめんなさい、と）

「・・・！」

「どうしたんだ？ルル」

カズマがルルに訊く。

「今・・・ラルが・・・」

「え！？」

その言葉にシンジは驚く。

シンジも、ララからラルについての話は聞いていた。だからこそ驚いている。

「５５５はもう・・・すでに・・・この世界に来ている・・・」

ルルは、何かに導かれるように歩き始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ラル・・・」

一方、ララはラルの声を聞いて安堵の息を漏らしていた。

「良かった・・・。あ、そうだ。カブトを、探さなきゃ」

ララは、再び歩き出していた。

「５５５は、ルルが探してくれる・・・か・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「此処は・・・何処だろう・・・」

尾上タクミは困惑していた。

いきなり知らない場所に来たら、誰だって困惑する物だ。

困惑しないのは、慣れているか、ただマイペースなだけだ。

「はあ・・・」

ちなみに、彼は学校から下校中だった。

家に入ろうとドアに手をかけ、家へ入ろうとしたら、まったく知らない場所に来ていた。

龍騎とほぼ同じなのには突っ込まないでおこう。

「・・・・・」

タクミは、呆然と立ち尽くすだけだった。

続く

八話「クロックアップと誤解の連鎖」（後書き）

ルル「・・・そういえば、ソウジはまだ話していないから、タクミのほうが先に出たって事になる・・・・」
ララ「あ！」
シンジ「そういえばさ、ルルってヤンデレって設定だけど、どんな感じなんだろう・・・」
カズマ「元祖ヤンデレが言うか！？」
シンジ「カ～ズ～マ～・・・」
ルル「・・・」←カズマにぴっとりくっついている

ユウスケ「ルルはララちゃんかカズマ関係で病むに一票」
士「・・・俺もそれに一票入れておこう・・・」
夏海「私もです・・・」

次回予告
ルル「カブト捜索をするララ。５５５捜索をする僕達。そして、知らぬ場所に来て困惑しているカブトと５５５こと尾上タクミ。その四つは、いま、重なり合う」

ルル「はあ・・・。急いでるからって・・・これはないだろう・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5213y/

仮面ライダーディケイドとある世界

2011年11月27日19時53分発行